

学びの質の高まりをめざして ～課題に向かう対話を深める～

1. 研究主題設定の理由について

(1) 昨年度の研究実践から見えてきたもの

「学びの質の高まりをめざして」という研究主題を掲げて2年目となった昨年度、研究発表会の講演で佐藤先生に次のようなご意見を頂いた。

- ①聴き合うかかわりが成立し、しっとりとした教室が実現していること。
- ②黒板からプロジェクタへ教室環境が整備されていること。
- ③小グループの活動をもっと活用し「ジャンプのある学び」を追究すること。
- ④学びのデザインを単純化し、子どもとのかかわりを細やかにすること。
- ⑤聴く、つなぐ、もどす活動でのポジショニングを研究すること。

これまで、我々は学びを対象・他者・自己と対話することで熟成される三位一体の活動であると考え、実践を重ねてきた。「授業の成立」から「学びの成立」への意識転換を図り、子どもに寄り添い、一人一人の学びから学級全体の学びを見ろという考え方を採ってきたのである。さらに、正しい価値判断をもつこと、主体的・創造的な行動ができる資質や能力を育てることを目標に、学びの過程を重要視することで、子どもたちがより対象の本質や価値、真理などに迫ることができるようにしてきた。

しかし、上記の③にあるように、「ジャンプのある学び」への挑戦はまだ始まったばかりである。そこで「ジャンプのある学び」を追究するために、聴き合うかかわりに加えて、「考え合うかかわり」、「探究し合うかかわり」を授業の中に創造していく必要があると考えた。2つのかかわりは小グループの活動をもっと活用し、協同的なものにする事で創られていく。また、子どもたちが向かう課題を工夫し、子どもたちの内面に課題を解決しようとする動機付けが行われる必要がある。そうすることで、対象に共に向かおうとし、「考え合うかかわり」「探究し合うかかわり」が生まれ、子どもたちの対話の深まりにつながるのではないかと考える。

(2) 子どもの実態から（アンケート資料参照）

本校では、多くの子どもが互いの発言に耳を傾け、自分の考えを言うことができるようになってきている。そして、仲間の考えを受容的に聴き、自分の考えを更新していける子どもも増えてきた。

しかし、アンケート結果を見ると、対象に深くかかわり、思いや願い・考えを活発に伝えることができる子どもの中にも、自分の考えや思いを述べることに一生懸命になりすぎてしまう子どもがいる。また、聴くことに終始し、自分の考えをうまく表現できず、仲間の考えに賛成してしまう子どももいる。グループでの話し合いは意見がまとまらず大変だと感じている子どもが約半数いるにもかかわらず、グループ学習が好きだと答えた子どもは80%を超え、一斉学習よりも自分の考えを言うことができると答えている。

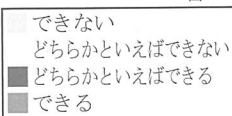
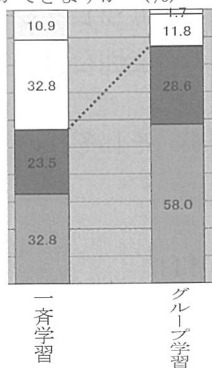
しかし、仲間と考えが違うとき、話し合ったり、仲間の考えに付け足した



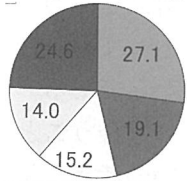
「学びの成立」へ



質問2・3 [6年生]
自分の意見を言うことができますか (%)



質問18 [全校]
話し合いで友だちの考えと違うときどうすることが多いですか (%)



■ 自分の意見を言う
■ 友だちの意見を聞く
■ 友だちの意見にかえる
■ 話し合う・付け足す・まとめる
■ その他

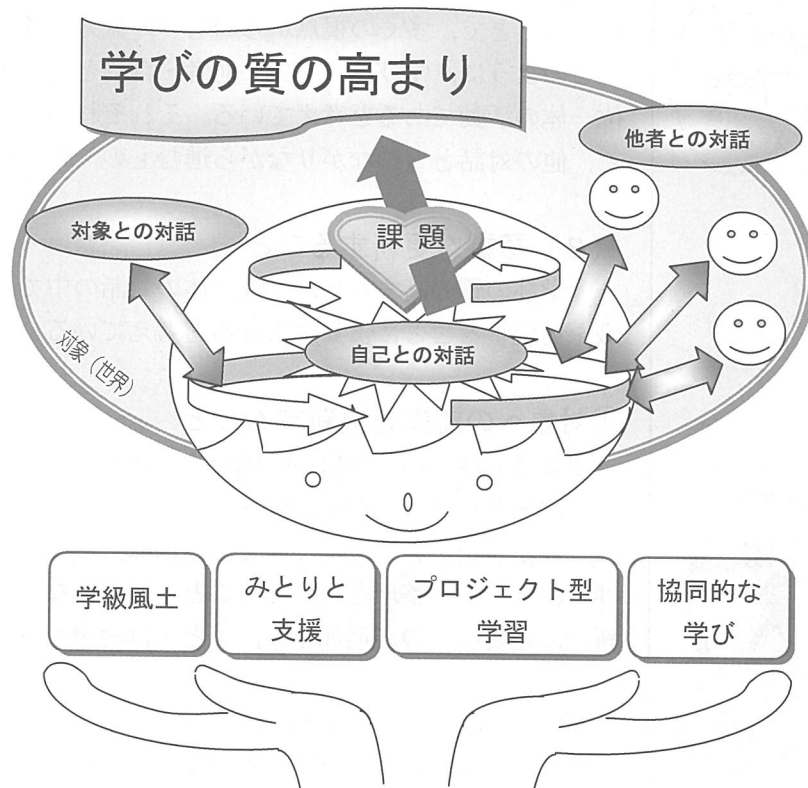
学びの質の高まり
をめざす全体像

り、一つにまとめたりすると答えた子どもは全体の14%であった。仲間の考えや思いを活かせなかったり、仲間との共通点を見出せないままになったりする子どもが多いのである。そこで、よりいっそう協同的な学びの場を多く設定し、子どもたちの内面に自己の課題を解決しようとする課題意識を生み、仲間と共に課題を解決しようとするための対話がなされるようにしなければならないと考えた。

2. 今年度の研究主題

上記のことを踏まえ、どの子どもも授業に前向きに参加し、自己の課題に向かうことで、自分の力で学び取ったという喜びを実感できる授業をめざしていく。その中に対話の深まりを生み出したいと考え、今年度の研究主題を次のように定めた。

学びの質の高まりをめざして ～課題に向かう対話を深める～



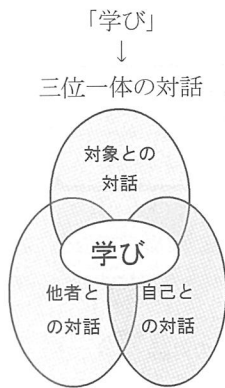
3. 「学びの質の高まり」とは

(1) 「学びの質の高まり」を支えるもの

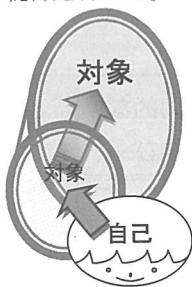
我々は、これまでの研究において、「学びの質の高まり」を支えるものとして、以下のようなことを大切にしてきた。

1. 「学級風土」を創る。
2. みとりと支援を積極的に行う。
3. プロジェクト型学習を創る。
4. 小グループによる協同的な学びを進める。

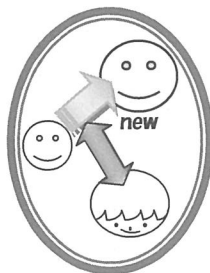
協同的な学び



対象とかかわり
認識を深める。



他者の変容から
ともに学ぶ。



今後もこれらを土台として「学びの質の高まり」をめざしていくことに変わりはない。そして、ジャンプのある学びを追究するために、「4. 小グループによる協同的な学びを進める。」に焦点をあてる。なぜなら、対話を深めるためには、全体で話し合うよりもグループで一人一人が責任をもって話し合うことが有効であり、一人一人の学びを保障することもできるからである。グループでは違う考えをもつ子どもが、互いに自分の考えをぶつけ合うことから、新たな気付きが生まれ、自分の考えを改めたり、互いの考えを認め合ったりすることで対話が深まっていく。そして、グループの中で仲間や仲間の考えを大切にされた共感的な関係が生まれ、共に協力して創りだそう、探ろうとする学びが構築できる。

(2) 三位一体の対話

子どもは自らの意思で目の前にある対象とかかわり、対象のもつ意味を明らかにしていこうとする。他者もまた、対象への興味をもち対象のもつ意味を探ろうとしている。そこで他者の対象に対する思いや願い・考えに触れ、似ている点や違う点を明確にしていく。そして、他者と考えや思いを擦り合わせることで、多くの視点からのものの見方や考え方を得ていくのである。

このように、学びは、対象・他者・自己と対話することで成熟していく三位一体の活動であると考えている。それぞれの対話は、独立したものではなく、他の対話ともつながりながら進むものである。

(3) 認識を更新すること

「学びの質の高まり」は三位一体の対話の中で、対象・他者・自己への認識を更新することにより生まれると考えている。

①対象への認識を更新すること

今までもっていた対象への思いや願い・考えが、三位一体の対話の中で、「実は～だった。」「やっぱり～だった。」というように更新されていく。対象にたっぷりかかわるだけでなく、多様なものの見方・考え方が絞られ、ひろげられ、分類・整理されていくことで、余計なものがそぎ落とされ、そして新たに必要なものが追加され、子どもは対象への認識を深める。

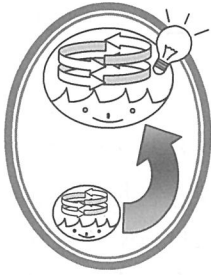
②他者への認識を更新すること

他者との対話によって、他者の学びの姿勢に共感し自分に活かしたり、他者の思いや願い・考えに共感し共有できたりしたときには、対象の意味を捉え直すことができる。

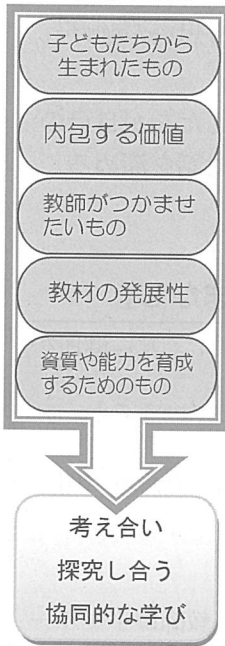
また、協同的な学びから、他者の思いや願い・考えにじかに触れ、「～の考えをもっていた～さんが～と考えるようになった。」といった、ともに学ぶ仲間の学びの変容までも認識していく。そうして、仲間のよさに目を向けると同時に、他者の存在の大切さに気づくようになる。その際、謙虚に聴こうとする姿勢、ともに学ぼうとする姿勢が育つ。

このように、他者への認識を更新することによって、集団としての学びの質が高まっていく。

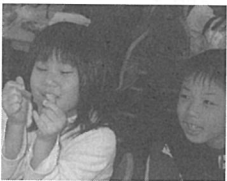
対話から自己の変容に気付く。



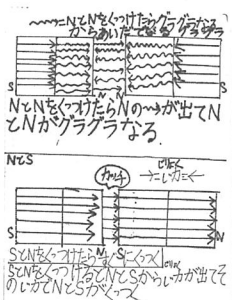
課題に含まれるべきものとは



問題が生まれる



対象の真理に迫る



③自己への認識を更新すること

自己への認識を更新するとは、自分は対象をどのように認識できるようになったのか、自分は他者をどのように思うようになったのか、自分がどのように変容したのか、ということを知ることである。自己への認識を更新していくことは、自己の成長を認識することであり、加えて自己がまだ認識できないことを認識することでもある。だから、自己への認識を更新することは、問い続け、学び続ける子どもたちには必要不可欠である。

4. 課題に向かう対話とは

(1) 学習課題を自己の課題へ

学びを成立させることに、学習課題は非常に大きな意味をもつ。なぜなら、学習課題が、簡単に解決できるものであれば、対話が深まることはなく、学びの質の高まりも見られないからである。

加えて、授業における学習課題は、子どもたちから生み出されてきた問題から設定することが望ましい。そして、我々は、子どもたちが対象にどのような問題意識をもっているか、その教材の内包する価値は何か、ということの的確に把握し、ジャンプして手の届くような学習課題、多方面からのアプローチが可能な学習課題を設定すべきである。

また、対象に対して子どもたちがもっている問題から生まれてきたものや、教材の価値を獲得するためのもの、教材の発展性を考慮した概念形成を意識したもの、子どもたちの主体的・創造的な行動ができる資質や能力を育成するためのもの、そして、教師がその教材でつかませたいものなどを総合的に見る必要がある。そうすることによって、子どもたちが考え合い、探究し合える協同的な学びが生まれると考えるのである。

【学習課題設定の例】

3年生理科の磁石の単元において、

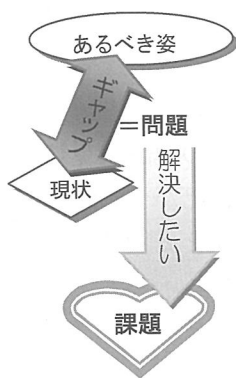
「磁石と磁石の間の力をさぐれ！」

という「ジャンプのある学習課題」を設定した。

これは、

- ①教材の内包する価値＝「同極同士は退けあい、異極同士は引き合う」
「磁石につくものとつかないものがあること」
 - ②子どもから生まれてきた問題＝「磁石と磁石の間に何かはさまっているみたい。」「どんな力がはたらいてるの？」
 - ③教師がつかませたいもの＝「自然の“文脈”をさぐる学び」
- の3つを考え合わせたものである。

このような学習課題を設定し、協同的な学びを創造することで、子どもたちが考え合い、探究し合えるかわり生まれ、三位一体の対話が深まる。本来3年生で獲得しなければならない①はもはや前提となり、子どもたち全員が①を習得するだけでなく、それらの対象がもつもっと深い真理（磁力線・エネルギー概念など）にせまろうとした。



(2) 対話を深める

我々は、現状とあるべき姿との間にできるギャップを問題と捉え、子どもたちがそれを「解決したい、改善したい」と思ったときに、問題が自己の課題に変化すると考える。

このように、自己の課題をもって対象と対話することにより、それまで漠然としか捉えられていなかった対象を、ある視点をもって見たり考えたりできるようになるであろう。協同的な学びにおいては、他者と課題を共有することにより、焦点を絞った対話が期待できる。そこでは様々な見方や考え方に触れることによって葛藤が生まれ、以前よりも深く対象を認識することができる。また、課題を設定した時点での自己と、課題解決後の自己の変容を認識すること、さらに、その認識を更新していくことによって、学びの質が高まるのである。

そして、子どもたち一人一人の「課題を解決したい」という思いが強ければ強いほど、考え合い探究し合う学びが構築できると考える。

そこで今年度は、ジャンプのある学習課題を設定し、子どもたちが自己の課題として位置づけることによって、対象・他者・自己との対話を深めることに挑戦する。

5. 「学びの質の高まり」の実践例 6年生国語「やまなし」

小グループでの協同的な学び



対象への認識を更新



○初発の感想から出された問題 「なぜ五月と十二月なの。五月と十二月には何か意味がありそうだ。」

○学習課題 「賢治は五月・十二月に対してどんなイメージをもっているのか。」
ひとり読みの段階では、

ア：表面的な明暗の表現の中に対比するように命の奪い合い（暗）と恵み（明）を捉えかけている子

イ：表面的な明暗に気づけた子

ウ：明確なとらえが出来ないでいる子

がいる。4人グループになりそれぞれの読みについて伝え合う。教師は小グループをまわりながら、ある子の発言に着目させたり、グループの話し合いの方向と違う考えを投げかけたりするなどの支援を行った。

その後、学級全体での話し合いでは、

A：実際見た感じでは暗いイメージがあるけれどもやまなしが落ちて来るというのは幸運に恵まれて、話の内容がおだやかになって明るいイメージがあると思います。Bくんが十二月のイメージについて言ってくれと思います。

B：ぼくが十二月についてイメージしたことは、やはり暗いイメージと明るいイメージがあって、P11の2行目辺りはしんとして、その部分は十二月というのは冬でそれで魚が減ってさみしいとか悲しい感じがするけど、おいしいやまなしがふってきてかたちにたちにとってやまなしはとても明るいようなイメージを感じさせるものだからさみしいけれどそんな幸運なものがあるから、2つのイメージがありました。

というように小グループでの協同的な学びによって、必要に応じて友達に関連した発言を促しながら十二月の読みについて話し合いを進めていく。その結果、アの子たちは、自分の捉えについて自信をもち、イの子たちは、新たな視点を加えて対象を捉え、ウの子たちは自分の捉えをもてるようになることで、それぞれの認識を更新させている。さらに、教師は、「なぜやまなしという題名なのだろう。最後にしか出てこないのに。」という問題に目を向けさせるために「さっき、五月は生きていくために犠牲が出るって言ってくれた。魚の命がなくなるって。でも、十二月は、やまなしの命がなくなるわけでしょ。これはちがうの。どちらも命はなくなるけど。」という投げかけをする。

《研究構想図》

【学校教育目標】

Sensibility—豊かな感性— Intelligence—質の高い知性— Creativity—輝く創造性—

【めざす子ども像】

○対象・他者・自己と対話し、学習を愉しむ子 ○仲間と協同し、市民性のある子 ○自然と共生し、創造的に生きる子

研究成果と課題

子どもの実態

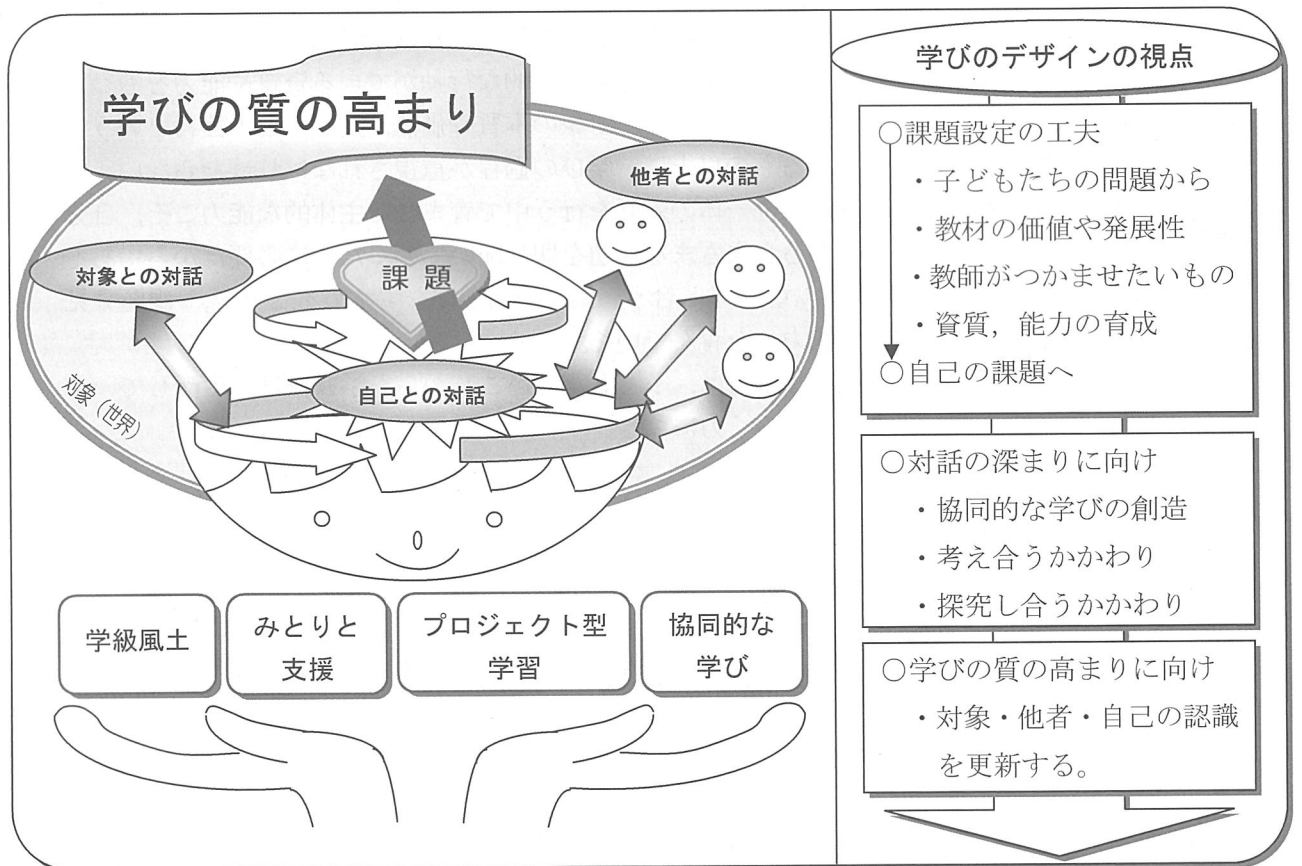
知識基盤社会における教育課題

【研究主題】

学びの質の高まりをめざして
～課題に向かう対話を深める～

【研究仮説】

子どもたちが内面に自己の課題をもち、協同的な学びを進め、考え合い探究し合うかかわりを築くことで、対象・他者・自己との対話を深め、学びの質を高めることができる。



授業の実際・評価

【確かな学力を育む】

○創造的な思考力 ○豊かな表現力 ○的確な判断力 ○課題発見力 ○課題解決力

研究の評価

学びについてのアンケート，設問表

【4択形式】

質問1：授業中，グループで活動をするのは好きですか？

質問2：学級全員での話し合いで，あなたは自分の意見を言うことができますか？

質問3：グループの話し合いなどで，自分の意見を言うことができますか？

質問4：グループでの話し合いで，あなたは友達の話聞いていますか？

質問5：話し合いをするとき，友達の気持ちを考えていますか？

質問6：授業の中で，「なにを考えたらいいの？」と思うことがありますか？

質問7：自分の考えと違うところがあっても，グループや友達と決めたことに協力できますか？

質問8：みんなで話し合うことは好きですか？

質問9：話し合いをすることでわかることは多いですか？

質問10：一人で学習することは，友達と学習することよりもよくわかりますか？

質問11：グループでの話し合いは，意見がまとまらず大変ですか？

質問12：授業で自分の学習したいことと，クラスで学習することが違うことが多いですか？

質問13：わからないことがあったとき，あなたはどうしますか？

【自由記述形式】

問14 グループや友達などと一緒に勉強することの「良いところ」はどんなところですか？

問15 学習内容を「よくわかった！」と思えるときはどんなときですか？

問16 勉強をしていて、「自分が成長した」と思えるときはどんなときですか？

問17 「勉強したい！」「調べたい！」と思えるのは，どんなときですか？

問18 話し合いなどで，友達の考えと違うとき，あなたははどうすることが多いですか？